サルー
Salud!★ 22 号
2016 年９月 16 日

●キューバ友好円卓会議　通信
e-mail：cuba.entaku.0803@gmail.com
FAX　03－3415－9292　　http://cubaentaku.web.fc2.com/
〒157-0073　東京都世田谷区砧 8-15-14-101

2016 キューバ友好フォーラム

10 月22 日（土）13:30～16:30 開場 13:00

会場　　参加費　1000 円（会員　500 円）★事前申し込みは必要ありません

日本記者クラブ大会議室　　TEL 03－3503－2721　　東京都千代田区内幸町２－２－１ 日本プレスセンタービル９階

最寄り駅は東京メトロ千代田線・日比谷線霞ヶ関駅、東京メトロ丸ノ内線霞ヶ関駅、都営三田線内幸町駅、ＪＲ新橋駅日比谷口

専門家がゆく キューバ医療・医学の現場

講演１　グローバルヘルスから見た★キューバ

北　潔（きた きよし）さん

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授・研究科長

1951 年生まれ。東京大学薬学系大学院博士課程修了。東京大学理学部・植物学教室助手、順天堂大学医学部・寄生虫学教室講師、イリノイ大学客員研究員（1988 年９月まで）、東京大学医科学研究所・寄生虫研究部助教授、同大学院医学系研究科国際保健学専攻生物医化学教室教授、同医学部健康総合科学科学科長（2008 年４月～2011 年３月）、同大学院医学系研究科副研究科長・副医学部長（2011 年４月～2015 年３月)を経て現職。

完全に魅入られてしまい…２度目のキューバ訪問

本年（2016 年）７月 28 日から８月４日まで、十数名の仲間と「福祉フォーラム・ジャパン」とのグループ名でキューバを訪問してきました。目的もメンバーの背景も大変に多様で、福祉施設長、リハビリテーション関係の医師、看護師、助産師、報道関係、大学の教員などなど。中南米が初めての方もいれば、ＪＩＣＡ（国際協力機構）の専門家で長年中南米に滞在していた方まで、本当に様々な背景のメンバーでした。唯一共通していたのは、キューバに対する興味と優しい心持ちでした。

私は薬学部出身で、生化学という基礎生命科学の分野で研究を進めてきました。いわゆる「試験管振り」です。いろいろな偶然と必然の結果、寄生虫学の分野に入ることになりました。そして 30 代前半の時、それまで予想もしていなかった南米パラグアイに、ＪＩＣＡの医療協力プロジェクトのリーダーとして家族とともに赴任することになりました。

それ以来、中南米の明るい雰囲気とスペイン語（ほとんど話せませんが）が大好きになり、何かきっかけがあると中南米に行きたいと思うようになりました。キューバには以前、中南米の寄生虫学会に参加し、マラリアをこの地域でいち早く撲滅したこの国の公衆衛生、クラッシックカー、葉巻、ラム酒……に完全に魅入られてしまいました。

今回、大変にまじめで、しかも楽しいメンバーと一緒に２度目のキューバ訪問の機会がありましたので、専門としている感染症・グローバルヘルスの観点から感想を述べてみたいと思います。

講演２　キューバと日本★医療の違いを考える

安田　清（やすだ きよし）さん　掛川東病院整形外科／静岡県掛川市

ただキューバの医療は素晴らしい、という話で終わるのではなく、日本の医療者として、日本の医療との違いを考え、それを日本に伝えることは大事だ、という気持ちがあり、なぜ私がそう思うか、ということを話したいと思います。

どなたでも自由に参加できます♪

お問い合わせはFAXかｅ-mail でキューバ友好円卓会議へ

目次

新連載『白根全のキューバの呪い』①…2～3P／新連載『松尾光のキューバ右往左往』①…4～6P／報告 2016・6・25 キューバ友好フォーラム「どうなるキューバ☆ラテンアメリカ」…7～10P／10・25「第4回 全国キューバ友好の集い」のご案内…3P／BOOK『キューバ医療の現場を見る』…6P

連載 ★ 渡航歴 30 回、滞在日数約２年

白根 全の
キューバの 呪い ①

この街には
何度も来ることになりそうだ…

プロローグ

高い空だ、と思った。海からの風がくすんだ空気を吹き払うのか、それとも車が少ないからだろうか。ハバナの空は、今まで目にしたどの街の空よりも澄んで見えた。

その空がいつの間にか重く分厚い雲に覆われ、あっという間に土砂降りのスコールがやってくる。道行く人たちは、建物の軒先や大きな木の下で雨宿り。20 分もすれば、雨は足早にどこかへ走り去ってしまう。水たまりを避けながら歩き出す人々の歩調は、どこか踊るように弾んで見える。ふしぎな街、というのが最初に思い浮かんだ印象だった。

次の角を曲がる。やみくもに歩き回る。犬がいるところだけじっくり立ち止まるいつものスタイルだ。歩く民俗学者、宮本常一氏の教えを思い出した。初めての街では、とにかく最初に高いところに登って街の輪郭や作りをじっくり眺めるのが正解だ。

1959 年１月１日、独裁者バチスタ政権に対する革命闘争に勝利した司令官フィデル・カストロ・ルス率いるバルブードス（髭男たち）が、最初に司令部を置いた旧ヒルトン・ホテルを目指す。ハバナの新市街中心部にそびえ立つこのホテルは、現在「ハバナ・リブレ」と名を変え生まれ代わっている。かつて、この中二階はラッキー・ルチアーノやマイヤー・ランスキーら、シカゴ系マフィアの大物たちが仕切る大規模なカジノだった歴史的文化遺産だ。発狂しそうなほどのろいエレベーターで最上階へ。吹き抜ける風が気持ちよいテラスから街を見渡した。

質素な街だ。いかにもソ連製、というタイプの不細工な高層ビルや、革命前に建てられた大きなホテルが目立つが、街並みはやさしくハデさがない。ハッタリが感じられない正直な街。楽しくなりそうだ。

音だけはうるさいが、ほとんど冷えていないエアコンの前で涼んでから、きつい日差しの通りを歩き出す。ラーダやモスコビッチ、ソ連製の無愛想に角ばった車に、1950 年代からずっと現役のキャデラックやオールズモビルの丸いシェープが混じる。剥げた塗装のボロ車たちが何ともユーモラスでかわいい。

カストロの母校ハバナ大学の前を抜けて、次の角を曲がる。ゆるやかに下る通りを歩いていて、何かが違うことに気づいた。ほかの街と違う。決定的に違う。ペンキの剥げかけた壁。ガタついた建てつけの家々。歪んだガラス窓。デコボコの街路。何が違うのだろう。緑が濃く見える。植物が元気。いや、違うな。働くのが嫌いそうな人々？　それも違う。水蒸気をたっぷり含んだ空気？　どこかアジアの街みたい？　まだ違う。大気中の微粒子が熱気とともに立ち騒いでいる。

次の角を左に曲がったところで、急に気がついた。世界中のどこの街に行っても必ず見かけるものがない。当たり前すぎて目にも留まらないものが、確かにこの街にはない。グローバル・スタンダードからまったく外れている。どこでも目にするもの、そう、コカコーラの赤いロゴ。クレジットカードの黄色いサイン。ファーストフードのどぎつい看板。広告らしい広告がまったくない。

常日頃、意識せずに視界のある部分を占めているお約束

の存在。それが取り除かれただけで、世界はこれほどまでに違って見えるものか。アクセントになっているのは革命スローガンの看板だけだ。半分崩れかかった建物すら健気に見える。まったく化粧っ気のない、素っぴんの横顔がまぶしい街だった。

歩きがいがありそうだ。また、屋根の上に黒い雲が広がり始めていた。スコールが近づいている。通りを行き交う人たちが、サルサのリズムで駆け出していった。

４歳だった少女はこの空を記憶の片隅に刻んだろうか。きつい太陽の光や、甘く濃い夜の闇を思っただろうか。急にやってくる雨を避けて走る母親の手を握りながら、弾むように駆けたのだろうか。

1987 年、大韓航空機爆破事件で逮捕され死刑判決を受けた北朝鮮の秘密工作員、蜂谷真由美こと金賢姫（キム・ヒョンヒ）は、ハバナに赴任した外交官の両親と４歳までこの街で暮らした。当時の大使館は取り壊されてしまったため、ハバナの街にその痕跡は残されてはいない。

だが、彼女が目にしたであろう空や太陽、そして夜の闇は、今もそのままだ。爆発物を仕掛けたときか、拘束され服毒自殺を図ろうとしたときか、あるいはソウルに移送され自決防止用のマスク姿でタラップを降りたときか、彼女はこの空を思い浮かべていたような気がした。切ないほど澄んだ空だった。

この街には何度も来ることになりそうだ。心の奥底で自分ではない誰かの声がした。もう 30 年近く前、最初にキューバに入国した翌日の午後のことだった。以来、何度キューバを訪れたことだろうか。渡航歴 30 回、滞在日数は合計すれば２年弱。あの午後、耳にした声はやはり真実だった。（続く）

しらね　ぜん

日本で唯一、世界中でも２人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。
仕事（撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など）、その他（探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など）、さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類 400 万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネートも担当。これまでに訪れた国は、６大陸、150 カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989 年以来、30 回目の訪問をマークした。

キューバとの友好をめざす各団体に参加の要請があり、キューバ友好円卓会議も参加します。

入場無料★どなたでも自由に参加できます。参加される方は、どの分科会に参加されるかを円卓会議(下記)までお知らせください。

FAX 03-3415-9292　e-mail cuba.entaku.0803@gmail.com

第4回　全国キューバ友好の集い

ケニア・セラーノ・プイグＩＣＡＰ総裁を迎えて

9月25日（日）13：00～17：00

主催　駐日キューバ共和国大使館

会場　エデュスカ東京（全国教育文化会館）７階会議室　TEL 03-5210-3511

東京メトロ有楽町線「麹町駅」下車徒歩２分、東京メトロ丸の内線・南北線／
ＪＲ線の「四ッ谷駅」下車徒歩７分／都営新宿線、東京メトロ有楽町線、ＪＲ線「市ヶ谷駅」下車徒歩７分

プログラム

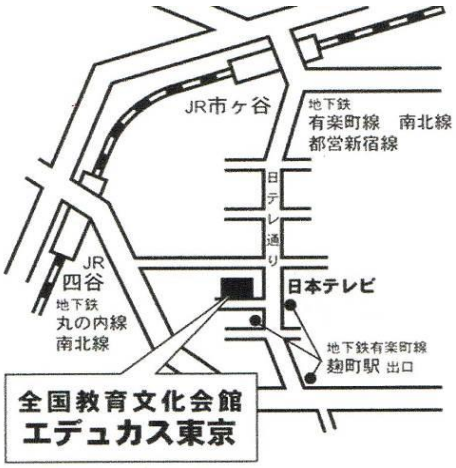
13:00　全体集会　マルコス・ロドリゲス駐日キューバ大使あいさつ
ケニア・セラーノＩＣＡＰ（キューバ諸国民友好協会）総裁あいさつ
友好団体の活動報告（ビデオ上映）

14:00　分科会　テーマ①「経済封鎖」②「キューバ訪問･ブリガーダ参加」
①の進行役　日本キューバ友好協会、CUBAPON、キューバを知る会・大阪
②の進行役　キューバ友好円卓会議、民医連、ピースボート

15:30　休憩

15:40　閉会会議　キューバから来日する伝説のルンバグループ
ムニェキートスデマタンサスの生演奏

17:00　終了



連載

サンクティ・スピリトゥスで孤軍奮闘

松尾 光のキューバ右往左往①

日本語、日本文化講座開設

夢は日本に留学させること

サンクティ・スピリトゥス　ヤヤボ橋

キューバへ行こう

私とキューバとのつながりは、ハバナ大学で日本語を教わった父の生徒達に会った 20 数年前にさかのぼる。彼らと何度か会ううちにキューバの人達の、貧しいけれど真摯な姿、ゆったりとした暮らし、20 年以上も父を慕う人間の絆の強さはどこからくるのだろうかと考えるようになった。

定年後に新たな挑戦をと考えた時、キューバの人たちのことが頭をよぎり「キューバへ行こう」と思い立った。思い立って１年半で実現できた。2016 年９月から３年間国際交流基金の支援を得て活動する。

サンクティ・スピリトゥスにて

行先はキューバの地方都市のサンクティ・スピリトゥス。ハバナから東へ 390km ほどの内陸都市。この地でのプロジェクトが決まるまで、キューバ人、日本人とのいくつもの運命的な出会いがあった。

サンクティ・スピリトゥスは街ができて 502 年だ。旧市街は復元し整備されている。観光資源はカソリック教会と歴史を感じるヤヤボ橋ぐらいで少ないが、ここにサンティスピリトス県の県庁があるので、ハバナに行かなくてもたいていのことは用がすむ。

日本語を教える

プロジェクトの内容は日本語、日本文化講座開設だ。サンクティ・スピリトゥス大学と「グアイアベラの家」の２箇所で行う。10 万人の都市で日本人は私ひとり。週５時間の講座を行い、３年間で日常の日本語が読み書きレベルになることを目標にしている。３年後に何人か日本政府の支援で留学させることが夢だ。

学習者は総勢 40 名。開講は「グアイアベラの家」が９月でサンクティ・スピリトゥス大学が 10 月。４月から４カ月かけてようやくアウトラインが決まった。

主体組織グアイアベラの家とは

グアイアベラとは、キューバの民族服でラウルカストロも公式行事で着ている。グアイアベラを展示する博物館が「グアイアベラの家」だ。この博物館は音楽イベント、美術展示、カルチャーイベントが主な活動だ。

サンクティ・スピリトゥス
カソリック教会

屋外ステージしかない場所にテレビや世界で活躍する音楽家が演奏しにくる。日本語講座は、今までのイベントとは異質のカルチャースクールだ。

共催のサンクティ・スピリトゥス大学

ハバナ大学が東大とすれば、ここは地方の国立大学だ。人文学部があり教員養成講座もある。教員は８割が女性で和気あいあいの雰囲気がある。学生はまだわずかしか会っていないが、おとなしいく真面目そうだ。

４月からの準備・国際交流基金とアカデミックビザ

活動資金は日本の国際交流基金の支援に頼る。５月初めに正式内定を得た。でも支援実施は８月末。それまでの費用は自費で賄った。一方、私の活動はキューバ政府が出すアカデミックビザに裏付けされる。

トラベルビザで行き、１カ月滞在でビザが書き替わる予定だったが、結局３ヵ月まち続けた。キューバへ行かれた方はわかると思うが、キューバでは手続きが信じられないくらいのんびりしている。仕事の進み方は、日本企業感覚の 10 倍ぐらいの時間をかかると思ったほうがよい。

トラベルビザ期限の数日前にすべてクリアになった。少し遅れると不法滞在になる綱渡りだ。それまで表立った活動はできなかった。

大学の学部幹部の方と私

日本語を学ぶオタクＳＳの人たち。私は右端

課外活動で歌う子供達のピアノ伴奏をしたり、音楽やクラシックバレーイベントを見学したりするぐらいだ。ようやく７月に動き出した。

９月からの活動内容

一時帰国の数日前に活動予定案ができた。

1．大学と「グアイアベラの家」の指導で、８月 30 日から９月６日まで生徒募集する。
2．大学では 2016 年９月６日から、準備を続け、2016 年 10 月に日本語と日本文化コースがスタートする予定だ。４時半過ぎに開始で一週間５時間の講座を３回に分けて行う。
3．「グアイアベラの家」は、曜日をかえて大学と同じ講座を行う。
4．一方「グアイアベラの家」では、オタクＳＳやサンティスピリトス県の文化庁と芸術庁が中心となって日本のサブカルチャーを愛好する活動がある。もりだくさんの予定だ。私もできるかぎり支援の予定だ。

主な項目は以下の通り。

1．着物、浴衣、装飾品の着付けとデモンストレーション。
2．盆栽の展示会と盆栽の作り方ワークショップ。
3．茶道の実演と茶道で使う道具の出品。
4．居合道、武道のデモンストレーション。
5．折り紙展示会と折り方のワークショップ。
6．日本映画祭。写真展。
7．子供たちと若者たちによる日本の歌とキューバ音楽のコンサート。松尾光先生がピアノ演奏する。私の趣味を活用する。
8．日本文学のワークショップ。俳句、短歌、日本文学の話など。
9．書道の実演のワークショップ。

これらのイベントはスペイン語で行われる。指導の日本人はいない。予定をたてただけで実際の活動これからだ。

アメリカとの国交回復の影響

米国の経済封鎖は解かれておらず、国交回復して 1 年たつが、人々の経済生活はほとんど変わらない。成長率１％で経済の苦境はつづく。一般の人は１ヵ月の消費は 100 ドル以内ではないかと思う。

旅行者は兌換ペソを使うが、一般は人民ペソを使う。価値は 24 倍の開きがある。私は人民ペソで生活している。店で買える品物は中国製だけで品揃えはない。社会主義国家の不便さで、買い物は大変だ。

経済封鎖がとけて企業が進出すれば変わると思うが、数年はかかるのではないか。不便な生活だが、格差がなく治安がよく、明るく穏やかな生活は変わっていない。

国交回復でも変わらない生活

1．キューバの人はものを捨てない。古着屋、古道具屋は街中にあふれて、10 年 20 年と使い続ける。たとえばテレビは、ほとんど 20 年前ぐらいのブラウン管テレビ。
2．店が混んでいると中に入れない。炎天下の道でじっと待つ。携帯費用やインターネット接続のプリペードカード購入は、いつも 15 分以上汗だくでドアの外で待つ。新しいものを買うことはとても大変。日本では 10 分ですむ買い物も、おそらく 10 倍の待ち時間を覚悟しないといけない。
3．品揃えが無いので、街でみる普段着や靴は、みな似たものを着ている。しゃれたカジュアルなスタイルの人はほとんど旅行者だ。
4．移動も大変。列車は 50 年ぐらい前の貨物車の様な車両で、安いが遅く乗り心地は不明。少し高価だが時間に正確な高速バスがあるが１日２本で、発車の１時間前

に手続きしなければならない。乗車手続きが、信じられないが30分ぐらいかかる。街中は馬車、人力自転車が主流で、高くて最大1回乗車400円ぐらい。

一方、旅行者は一般の交通機関は使わず、冷房付きレンタカー、タクシー、専用バスで日本の料金とあまり変わらない。あっと言う間に1万円使ってしまう。

5．車が少ないので道はガラガラで、空も真っ青。国道は整備されている。自家用車を持てば天国と思う。新車はほとんど中国製で高級車が現代自動車。日本の半額ぐらい。でも持てる人は100人に1人いるかいないかではないか。私の知人では、ハバナ在住のキューバ人が1人だけ新車に乗っていた。

6．キューバの人の自宅は、大学教授でも博物館館長でもあまりかわらず質素。冷房は10%以下と思う。男は大部分、家でくつろぐときは上半身裸。

7．でも最近金持ちで大きな家に住む人が出てきた。どのような仕事か聞きたかったがスペイン語で聞けずこれから調べる。

8．安倍首相が9月ハバナへ来る。日本企業の進出があるのか。これから格差社会になってしまうのか。

国交回復後に旅行者は激増、観光事業がヒートアップ

一方、アメリカのクルーズ船の寄港などで旅行者は激増している。日本人は倍々で増えて今年は2万人突破らしい。年齢層は定年後の世代が主流。全体をみればカナダ人、欧米人、ロシア人が多く、これにアメリカ人が加わった。

夏は暑くオフシーズンなのだが、今年は関係なく旅行者が国中にあふれている。観光に絡む人は羽振りがいい。

エピソード

1．ハバナでは大型ホテルの建築ラッシュ。街を歩くと工事の音が絶えることがない。

2．3月にオバマ大統領が来たので、通る道は突貫工事で整備した。とてもきれいだ。一方、路地はゆっくり整備中。道は掘り起こされている。

3．旅行に関する業務は、一部自営が許されて羽振りがいい。高収入が期待できる。

4．私の知人でハバナ大学の外国学部の出身者の何人かは旅行ガイドになった。ハバナ大学の外国学部は優秀で、卒業すれば各国語を流暢に話せる。大学の教職をなげうってでもガイドに転身している。エリートの就職先の1つになっているのかも。

ガイドは、とても忙しい毎日のようだ。私はいつもキューバの人へおごってばかりだったのだが、ガイドになったキューバの人に、旅行者用のレストランで初めておごってもらった。

5．サンクティ・スピリトゥスではホテル建設までいかず、自宅を改築して民宿にすることが加速している。欧米人がどんどん泊まりくる。去年泊まった民宿の主人は羽振りがよく、新車のバイクに乗っていた。

6．サンクティ・スピリトゥスではドイツ人の医学、薬学の交換留学生がおり、ドイツ人観光客が多い。私が宿泊している民宿にも欧米人が泊まりにくる。陽気なフランス人と仲良くなり、国柄が感じられておもしろかった。残念ながら、サンクティ・スピリトゥスで日本人観光客とはだれも会わなかった。おそらく団体行動なので、街をぶらつく余裕がないのだろう。

以上、観光事業で街が整備されてゆく流れが全土で広がっているようだ。それ以外の産業の様子は残念だがわからない。9月から40人の学習者と接するので仕事のことや生活のことを聞いてみたい。

まつお あきら

日本経済新聞社でＩＴ技術者として30年近く勤務。2016年３月に退社後、仕事とは無縁なキューバ行きを決めた。その経緯は、今から25年前に父親の松尾威哉さんがハバナ大学に日本語講座を開設したことにさかのぼる。

詳細は本紙21号（2016・４・４発行）11ページのBOOK『キューバの光と影 ― ボランティア日本語教師三年の記録』参照

10月22日（土）のキューバ友好フォーラム（表紙の案内参照）の会場で1728円（税込）を特別価格1300円（税込）で販売します。ぜひご利用ください。

BOOK『キューバ医療の現場を見る』

キューバ友好円卓会議編／同時代社　1600円＋税

本書は、2008年3月の円卓会議主催のキューバ医療ツアーの現地報告を中心に、医療制度や医療支援の現状がまとめられている。執筆者は、総勢35人からなる訪問団の中の８人の医療関係者によるもの。

キューバの医療・保健は、地域の住民が利用できる身近なコミュニテイから地区へと繋がる合理的なシステムが構築されているばかりか、それを支える人的な資源にも恵まれており、優れて機能的と思われる。

精神医療においても、精神障害者を入院病棟ではなく、地域の保健センターを多数作って、出来るだけ入院をさせない方針で、地域ケアに力を入れている。少しでも多くの方に、キューバの医療、教育に目を向けてもらいたい。

どうなるキューバ★ラテンアメリカ

パネリスト　敬称略／写真右から

小倉英敬　神奈川大教授・国際関係論ラテンアメリカ思想史専攻
八木啓代　音楽家・作家
伊藤千尋　ジャーナリスト・元朝日新聞記者

テープ起こし・井ノ上節子／まとめ・大賀達雄

小倉英敬

ラテンアメリカの現状とキューバ

減少傾向のラテンアメリカ中道左派政権

ここ３年間のラテンアメリカを見てみたい。状況の変化は、13 年３月のベネズエラ・チャベス大統領の死後からである。マドゥーロが大統領になったが、昨年 12 月の総選挙で、野党連合に大敗した。野党は、罷免の是非を問う国民投票を与党に迫った。今年６月、大統領は来年３月ごろの実施を表明している。

米国ケリー国務長官は、支持表明を行い、米国とベネズエラの高級レベル会談実施を発表し、両国の緊張が緩和されるだろうと発言している。来年 3 月実施の国民投票では、与党側は敗れるだろう。

アルゼンチンでは、中道左派の後継者が敗れ、現マリク大統領になった。５月にブラジルでは、ルセフ大統領が停職となった。今年 11 月、ニカラグアで大統領選挙があり、現オルテガ大統領が出馬を表明しているが、再選可能かは分からない。17 年５月には、エクアドル大統領選があるが、今の大統領は出馬できず、同じ路線をとる人が出なければ途絶える。ボリビアでは、モラレスが４選出馬できず、状況は悪くなってきている。

ラテンアメリカの中道左派政権は、33 ヵ国中 16 ヵ国あった。そのうち 10 ヵ国は残るだろうが、主要な中道左派政権が変わってしまう可能性がある。このような情勢をどう見るかが、大きなポイントとなる。偶然の情勢変化の重なりでなく、背後に何らかの動きがあると見ることができる。

かつてのようにＣＩＡが表舞台に出ることは、1980 年以降はないが、代替機関がある。ナショナル・エンドウメント・オブ・デモクラシー（NED）で、資金の 95%以上が米国から出ている。1989 年のニカラグア大統領選挙に介入し、90 年ハイチ、アリステッド大統領の敵対候補を支援した。ベネズエラでは未遂に終わったが、クーデター計画に関与していた。ラテンアメリカで、直接的ではないが、何らかの形で野党側を資金援助し、それ以上の介入を行っているというのが、私の見方である。

今後、ラテンアメリカでは、南米諸国連合やカリブ共同体などの求心力が失われていくことになる。ベネズエラとキューバが作ったＡＬＢＡ（米州ボリバール主義同盟）においても、ほとんどの国が抜けてしまうことになりかねない。急進派の多いカリコム（カリブ共同体）でも変化が生じていくことを、私は懸念している

米国との国交正常化で他の国々との経済関係強化へ

私は、90 年１月から 94 年９月まで、ハバナの日本大使館に一等書記官として勤務していた。92 年 11 月、米大統領選でパパブッシュがクリントンに敗れた。キューバのアメリカ利益代表部の参事官の話では、ブッシュが２期目に入れば､必ず国交正常化するということだった。しかし、クリントン政権下ではやれず、息子のブッシュは、支持基盤がネオ保守主義や反共キリスト教原理主義だからできなかった。今回 2014 年 12 月にラウル、オバマ双方から国交回復の話が出たが、これは 90 年代に起こってもおかしくなかった。

国交正常化の背景として、オバマ大統領個人の外交業績を上げておきたい。ヒラリー・クリントンへの借りを返すという意向があった。キューバ側の事情としては、中道左派政権の情勢変化と、最大の問題は、膨大な貿易赤字を抱え込んでいるということである。輸出が輸入の 40%しかない。普通こんな国は、機能しない。機能出来ているのは、サービス収入で補填しているからである。

一つは観光収入、もう一つは人材派遣である。ベネズエラへ医師、看護師を派遣し、極めて低価格で石油を提供してもらっている。来年、罷免を問う国民投票に敗れたら、ベネズエラからの支援を断たれてしまう怖れがある。チャベス死後、キューバはベネズエラからの支援に見切りをつけるよう追いこまれていたのではないか。

ローマ法王フランシスコの仲介で、国交正常化が始まると、キューバ側が応じ、今後は米国との正常化によって得られる他の国々との経済関係を強化する中で、ベネズエラとの関係が途絶えることで陥るかもしれない経済危機への対応を真剣に考えており、日本との経済関係の強化を求めるのは、その辺の事情からだろう。

ラテンアメリカの新自由主義は可逆的なもの

ラテンアメリカでは、90 年のチャベス政権の後、アルゼンチン、ブラジル、ニカラグア、ボリビアその他の中道左派の拡大、長期化があった。世界的動向として、2008 年リーマンショック以後、管理型経済モデルへの移行がみられる。これは、新自由主義経済に反するものだが、管理型資本主義の段階へ入ったと言われている。

しかし、最近のラテンアメリカ、インド、中国など新興諸国の動向は、必ずしも、そうではない。揺り戻しがあり、ジグザグではあるが、現状では、新自由主義が主流である。私の見方では、新自由主義は、地球環境問題や、食糧問題など、人類の問題に対処できない。個人的には、協同組合的社会主義が望ましいが、簡単にできるわけではない。当面は、資本主義の枠内で、管理型がいいのではないかと思う。

今、中道左派への逆風、不利な状況があるが、再び戻るのか、保守化が続くのか。私は、ラテンアメリカの新自由主義は、可逆的なものとみている。その根拠は二つあり、まず 6、70 年代と比べ、政治環境が変わってきている。民主的選挙で、変革勢力が政権に到達できるようになった。これは、不可逆である。

もう一つは、新自由主義では格差が拡大する。いずれは、革命勢力が力を強め、新たな主体形成のあと、再び戻るだろうが、10 年～20 年はかかるだろう。秋の米大統領選挙で、クリントンが勝った場合、夫が立ち上げた米州自由貿地域（FTAA）を、再びとりあげるだろう。TPP難航の一方で、FTAA交渉は、2005 年ブラジルなどの反対で挫折していたが、再現の可能性はある。

八木啓代

キューバと米国　国交回復の舞台裏

アメリカのキューバ潰しに抗ったヨーロッパ各国

キューバの激変は、過去に３回あった。1959 年のキューバ革命、1989 年のベルリンの壁崩壊によるソ連・東欧圏の消滅、そしてキューバと米国の国交回復。80 年代のキューバは、私はその頃行き始めたが、生活は豊かだった。ソ連から莫大な援助を受けていたから。ソ連からすると、アメリカに一番近い所に社会主義国としてキューバを置いておくのは意味があった。80 年代のハバナは、バスが 24 時間運行していたし、物質的にそんなに豊かではないが、貧しいという感じはなかった。

ところが、ベルリンの壁崩壊が起こって、ソ連・東欧圏が消滅し援助が一切無くなった。このころ南米は、ほとんど軍事政権かそれに近い状態だったので、キューバは孤立無援になってしまった。その頃の報道の論調は、北朝鮮とキューバは世界で最後に残った共産主義国家ということで扱われていて、忘れもしない、ニュースステーションで久米宏さんが、フィデル・ カストロの肖像が映ったのを前に、「馬鹿は死ななきゃ治らないとはこのこと」と言ったが、当時ほとんどの人がそう思っていた。それ位キューバは、孤立していた。

世界中が、キューバは潰れるだろうと見ている中で、アメリカは、キューバ民主化法案（トリセリ法）で経済制裁を強め、一気にキューバ潰しにかかった。ところが、反撃に出たものたちがいた。ヨーロッパだった。

ソ連・東欧圏が無くなって、キューバが潰されてしまうと、アメリカが一人勝ちしてしまうことに対し、ヨーロッパの人たちは、不愉快に感じたのではないか。突然、スペインとフランスが、キューバに対し援助を始めた。93 年、米ドル合法化、個人レストラン合法化と同時に、スペインとフランスのホテルチェーンが、キューバに進出してきた。合弁のレストランやホテルがどんどんできた。ブランドも進出してくる。ヨーロッパをターゲットにする観光開発が行われるようになる。

それまでのソ連・東欧型のサービスの悪い中、友好団体や近くの人たちが行く形から、一般の人や、ヨーロッパの客を相手とする、本格的なサービスを目指したホテル研修が始まっていった。私も、当時よく日本人から見たらどうか、ホテルに泊まってみた感想を聞かせてと言われたことがある。

94 年、フランス、イタリア、スペインの客が、どっとキューバになだれ込んできたが、フランスが中心となってヨーロッパにおけるキューバ観光ブームが起こっていた。夏場のヨーロッパでは、音楽フェスティバルが盛んだが、アフリカブームが一段落後、キューバブームになったが、これは、キューバを潰してはいけないという意味合いを持ってブームを起こし、沢山の観光客をプロモーションして、キューバに送り込んでいた。

一方、アメリカは、それを知らない訳はない。指をくわえて見ている状況になってしまった。音楽をやっている立場からいうと、実は音楽は政治と密接で、革命後、

世界を席巻したマンボやチャチャチャは閉め出されてしまった。つまり、アメリカがすべてのレコード会社を握っているので、革命後は世界の音楽市場から閉め出されて、キューバ音楽は日本に入ってこなかった。ところが、91 年に、ゴンサロ・ルバルカーバというキューバのジャズピアニストが、世界契約に成功した。東芝ＥＭＩができたのは、当時の日本の経済が凄かったから。80 年代キューバで公演したベネズエラのサルサ歌手は、アメリカから閉め出された。

アメリカ人のキューバ観を変えたブエナビスタ

94 年、プエルトリコの有名な歌手アンディ・モンタニェスが、キューバで非公式で公演を行った。95 年、アメリカの有名なジャズプレイヤー、ハービー・ハンコックも非公式にコンサートをした。非公式というのは、形の上でキューバの有名人のコンサートにして、口コミで、ハンコックが出ると伝える。あそこにハービーがいる、お客さん、もしかしたらハービー・ハンコック？　と促されたハンコックが嫌々ながら舞台に立つというもの。

こうして、94 年、95 年と続くと、アメリカのミュージシャンの間では、キューバでコンサートをやってくるのが勲章のようになっていった。97 年には、RMMがサルサ歌手イサーク・デルガードと正式契約をするが、アメリカ大手では初めてだった。こうなると、アメリカ中の会社が堰を切ったように、キューバのミュージシャンと契約する。そういう流れの中で出てきたのが、ブエナビスタ・ソシアルクラブだった。

コンパイ・セグンドは、何年も前からフランスで有名になっていた。アメリカ人にも受ける感動的ストーリーを作り上げて、キューバが受け入れられる素地をつくっていった。虐殺や拷問などが行われているとんでもない恐ろしいところという、それまでのアメリカ人の対キューバ観は薄れていった。この頃、非合法のキューバへの入国が行われていった。

2003 年、国会議員や人権団体 15 万６千人、非合法の訪問者２万２千人。非合法とは、旅行代理店が間にはいって、メキシコやジャマイカ経由で入国するもの。これでジャマイカ航空が、経営の息を吹き返したほどである。口コミでキューバ行きが広まっていった。

アメリカ財界が国交回復をプッシュ

2001 年のハリケーンの際、人道支援として食糧輸出が再開され、以後継続している。３年前あたりから、キューバは、アメリカにとって第４位の食糧輸出国である。アメリカ南部の農業地域から見るとお得な輸出先。アメリカ観光業界にとっても、非常に魅力的な投資先なのに、美味しいところをヨーロッパに持っていかれている、という焦りがある。そういう中で、アメリカ財界から、キューバとの国交回復をやろうというプッシュが行われていた。反キューバのキューバアメリカ財団というのもあったが、キューバを出た２世、３世の人にとっても、キューバとのビジネスチャンスを逃したくないという風に、考え方が変わってきた。そういう状況の中で、オバマ大統領の国交回復の選挙公約が掲げられた。

キューバ側もマリエル特区、個人営業の緩和、新外国投資法を作っていった。エボラ出血熱の流行に対して、キューバが医師、看護師を派遣すると、ニューヨークタイムズはキューバを讃え、国交回復をすべきだというキャンペーンを張った。このように世論的に、国交回復のための布石は敷かれていて、私的には気持ち遅かったという感じである。

ニューヨーク・ハバナ定期便が就航されるや、予約で一杯になった。キューバは、決して孤立していなかった。国交回復は、寝耳に水と言われるが、私にとってはそうではないし、キューバは激変しますか？　という質問には、いやキューバは激変しないでしょうと答えている。

伊藤千尋

したたかなキューバ
反撃する中南米の保守派

キューバ ←→ 米国の飛行機が1日 110 便！

キューバには、71 年、20 歳の学生のとき、半年さとうきび刈りで行き、その後朝日新聞記者、特派員などで 10 数回行った。今年１月～２月にも行った。（これから、映像交えての話）ハバナ中央公園には、アメ車のクラシックカーが並んでいる。経済封鎖以前のものだが、お蔵入りしていたものを修理して使っているのでピカピカだ。こうした車が急激に増えている。

１月の『Ｇｒａｎｍａ』には、海外からの観光客が記録的で、これまで１年で 300 万人だったのが、昨年は 350 万人と出ていた。アメリカからの観光客は８割増しで、国交回復効果である。これからキューバは変わるが、変わる前のキューバを見たいという訳である。キューバの観光産業は、確立していて受け入れ態勢はできている。

観光馬車があり、ロンドンにある２階建観光バスのような、今まで無かったものもある。どこのレストランにも音楽バンドがいて、自前のＣＤを売り、産業化している。こういうことが、今までとは違う。今年２月に、米・キューバ間航空協定により飛行機が飛ぶようになった。１日 110 便も。カナダとの間では 130 万人が来るが、

１日 15 便だ。キューバには 10 カ所の空港があるが、110 便は、凄い数。キューバはホテルが少ないので、2011 年に、党大会でそれまで無かった自営業も経済活性化の大事な一角と認め、許可をすることになり、民宿が開始されている。

今回行ったとき、土産店が増えていることに驚いた。アメリカで印刷されたゲバラのカレンダーが売られていた。もう一つ、空港を出て気付いたのが、太っているキューバ人が多いこと。今までで一番。儲かってきたからだ。地方都市の公園などで、携帯やスマホが見られた。今、国内の携帯・スマホは 300 万台で、ＰＣも使われており、大きく変わってきた。

カストロは米国からの人道支援食糧を現金で購入

どうして国交回復をしたかについて話したい。2002 年、ハバナ港に入るアメリカの貨物船の写真がある。2001 年 11 月、ハリケーン被害にあったキューバへ、ブッシュ大統領が人道援助として食糧を送ろうとした。９･11 のテロ以降、アメリカにとっての敵は中東にあり、ラテンアメリカを味方にしたい、固めたいということだった。フィデル・カストロは、経済封鎖している国から援助は受けないが、現金で買うと対応した。以来、貿易が始まり、毎年続いている。2002 年、キューバに行ったが、ホテル・ナショナルで 130 社のアメリカ企業が参加して、農産物紹介の物産展が開かれていた。どうしてこんなことがというと、前年、農産物が売れ、キューバ以上に、アメリカが喜んだ。空白の市場が目の前に現われたわけである。

モンタナ州は、牛肉・小麦の産地だが、近くだから輸送費がかからない。イリノイ州は、大豆・とうもろこしの産地。農産物業者は、ロビー活動し、政治家に経済封鎖解除を働きかけるようになっていった。前提として国交回復をと。この頃、イリノイ州出身上院議員の名前はオバマ。彼は大統領になったが、支持者からの突き上げがある。イデオロギーは関係ない、儲かるか儲からないかだ。去年のアメリカからキューバへの農産物額は 440 億円に上る。これに法的体裁を整える必要があるということである。

これを、もう一歩後押ししたのは、マイアミのキューバ人たち。亡命キューバ人が 120 万人いる。ピッグス湾事件の司令官は、キューバで掴まったが、釈放され、帰ってから弁護士になった。10 年前に会ってインタビューした。毎年キューバに行っていると言っていた。キューバから亡命したアメリカ大リーガーは、オフシーズンにキューバへ帰り、子どもたちに野球を教えている。

キューバ側としては、物があるアメリカに行ってみたい。アメリカ側は、一歩入れば即認める、亡命システムができている。受け入れ機関があり、いろいろやってもらえる。働いてドルを稼げる。亡命者が稼いだドルを送金し、あるいは持って帰り、キューバは潤沢になってきている。観光だけではない。

有機農業がなぜ盛んかと言えば、危機をチャンスに変えたということだ。ソ連の援助が一挙に無くなった時、キューバは潰れるかと思いきや、自前で作るしかないと、化学肥料を使わない有機農業をやりはじめた。この国は、相手がアメリカだろうがソ連だろうが、言い分を手玉にとるしたたかな国である。この辺が凄いところだ。

無料の医療と教育は維持するが、食は自分で

サンタクララのゲバラの像。左腕に包帯を巻いているのは、垣根を飛び越えようとして躓いて骨折したからである。包帯を巻いてあげたのは、革命軍の司令官でゲバラ直属の部下だった。この人に、今回会って話を聞いた。アフリカで一緒に従軍して、帰国後にはハバナ市長を 10 年間した。ゲバラは、一直線のイメージがあるが、冷めた面もあったという。相手の良いものは採用している。中央銀行総裁になったが、医学生だった彼が、なぜそれが出来たかというと、経済専門家を集めて、好きにやれ、責任は俺がとるからと言い、専門家に教えてもらい、勉強して３カ月経つと、もう教えることがないと言われた。

彼はアメリカのマネジメントシステムがいいから、取り入れようとしていた。良いものは、アメリカであろうが何であろうが、取り入れるという柔軟な発想があった。

配給所は、今はほとんど無くなり、細々とやっている。キューバは、絶対平等の共産主義は放棄した。法の下の平等は堅持しつつ、具体的には、医療の無料、教育の無料は維持する。その他、食べることに関しては、自分でやってくれ、国はそこまで面倒はみないとしている。

キューバの輸出入のアンバランスの問題は、アメリカの政策が大きい。キューバが他の国と貿易するのにもちょっかいを出す。トヨタがキューバから、ニッケルを輸入して部品に使っていた。すると、アメリカにトヨタの車が輸出できなくなる。そうやって、日本がキューバと貿易できないようにしてきた。キューバが輸出したくてもできない状況がある。

去年、ベネズエラに行った。1973 年のチリのクーデター直前の状況によく似ていた。店から物が消えている。政情不安を起こし、今の政権はひどいと。物がないわけでなく、資本家側が隠している。これは 73 年のチリと同じ。結果、与党は敗北した。

Q&A 会場からの発言も交えて

Q　国交回復後、キューバは今後どうなるか。

A（小倉） 八木さん、伊藤さんの見解についてひと言。メキシコやベネズエラで起こったことの背後は、必ず存在する。我々の知らないところで、動きがあり、2006年以前からあること。ルセフがもつかどうかについては、また、次期大統領選に出ようとしているルーラ潰しでもあるが、今後も継続されるだろうから、私は、楽観視していない。

90年代のキューバの経済改革は、中国やベトナムに比べ、幅が狭いという感じ。株式の売買自由化を、個人まで進めれば、株式市場に国内外の資金も導入され、資金が得られるようになって、変わる。キューバ側が考えてはどうか。

A（八木） 国交回復後、キューバは大丈夫かという話があったりするが、急激な変化はないと思う。90年代からの地道な交流活動やロビー活動あっての国交回復だから。スペシャル・ピリオド（特別期）と言われる90年代、キューバに対しアメリカは、厳しい締めつけをした。ソ連、東欧のような若者のムーブメントもあった。世界から取り残されて、これじゃまずいという若者グループがいた。しかし、ソ連、東欧との決定的違いとして、おじいちゃん、おばあちゃんから、59年の革命前がどんなだったかを聞いている。

悪い形で資本主義化すれば、アメリカに美味しいところだけ持っていかれると、改革派の若者でさえ分かっていた。キューバの国民には、アメリカ的資本主義への警戒心がある。資本主義を全面的にすればハッピーとは、思っていない。キューバは、したたかに発展していくと思う。

A（伊藤） ハバナ大学の先生が、観光案内に変わっている。その娘は、アメリカに留学しているというが、亡命システムを利用し、フロリダの大学に行っている。ピザハットでアルバイトして、母親に送金している。これが普通のキューバ人。

キューバは、アメリカまみれになるか。実は、ずっと前からアメリカまみれで、アメリカ人が好きなのだ。アメリカ人は、ロシア人より分かりやすいという。アメリカ文化は昔からあったし、今は、インターネットで入る。いろいろ利用するについては、キューバは、歴史を耐えてきて、したたかだ。

３世代を見てみる。革命を起こした世代と、革命の中で育った世代は、昔の中南米の悪い気質を引きずっている。政権とったら、美味しい部分を取りたいと。

生まれた時から革命後の文化の中で育った世代は、新しい人間になろうという教育を受けている。一人はみんなのために、みんなは一人のためにという。考え方が違う。それが、政権の中枢にいる。カストロ兄弟がいなくなったら、革命第３世代が政権を握り、キューバは良くなるだろう。

一つの問題。ベネズエラで見るように、中南米は、カリスマ性がものをいう。そういう人がいなくなるとグシャグシャになる。カストロの後が心配だが、ゲバラがものをいうかも。キューバの今後については、悲観していないし、そんなに変わるとも思わない。キューバ人のジャーナリストの言だが、「マクドナルドが入るには、しばらく時間がかかる」。

アメリカとの間では、気象と医療で、情報交換が進んでいる。クリントンが勝ったら、オバマより前から回復推進派だったから、事態は進むだろう。共和党が議会を握っているので、経済制裁解除は遅れるだろう。

Q　カストロの革命はナショナリズムの革命で、社会主義・共産主義の革命ではない。アメリカは、戦略的に間違った。オバマを歓迎したが、キューバはしたたかだ。人づくりに金をかけたり、教育に金をかけたりすれば最終的に勝つと思う。

Ａ（小倉）　キューバは、社会主義を目指していたとは思うが、本当に求めていたのは、正義と平等で、社会主義はその手段。単なるナショナリズムではない。本質的な部分を譲っていないという意見に賛成するし、最終的に人づくりが勝つというのは、まったく同じ意見だ。

キューバは今後も、ラテンアメリカの変革の精神的主軸となり続けるだろう。キューバ人は、日本人以上にサムライで、武士は食わねど高楊枝ぐらいの精神だ。

Ｑ　２年前、キューバに行ったとき、日系２世と話をした。一番の悩みは、指導層がうまく世代交代していない、革命精神が原点に戻っていないと話していたが、どうか。それと、革命博物館にバチスタ時代の展示が少ないのはなぜか。もっとあったほうが、教育にはいい。

Ａ（伊藤）　世代交代が進んでいないのは、おっしゃる通り。革命を起こした世代は、幹部として残った。しかし、40、50 代が、閣僚の中心となって実質的に動かしている。そいう意味では、世代交代は進んでいる。

博物館に関しては、キューバにとって、革命は今の話で、アメリカとの戦いはどうするということで展示が多い。

Ａ（八木）　革命博物館は、70 年代につくっている。想像だが、あの頃の人たちは、バチスタ時代は、よく分かっていたことで、展示する必要がなかったということではないか。

40、50 代の人は、外交官だったりすると、合法的にアメリカのハーバード大学、スタンフォード大学などに留学して、キューバの対アメリカ政策研究所にいたりする。日本にも、京都大学に留学したり、遺伝子研究所に来たりした。

ソ連崩壊時、アメリカがキューバに攻めてくるからと、友だちは、戦争になるから帰れと言ったり、枕の下に銃やマチェテ（山刀）を置いたりして寝ていた。サイレンの鳴り方で、どういう非常警備態勢をとるか、といった緊張感のなかでここまで来た。革命は、過去のものではない。

Ｑ　ベネズエラやブラジルの動きの背後にあるアメリカの力、メキシコ、ブラジル、アルゼンチンの巨大メディア攻撃に対して、ラテンアメリカ諸国は、どう対峙していくか、展望を。

かつてのチリやアルゼンチンのような露骨な介入は無いと思うが、アメリカの巨大メディアと新自由主義にどう対峙していくか。私は、地域としてまとまって対峙していくのではないか、その時、キューバのしたたかさ、手腕はカギだと思うが。

Ａ（小倉）　おっしゃる通り。ここ１、２ヵ月を見ても、ベネズエラのマドーロ大統領のキューバ訪問、キューバ外務大臣のベネズエラ訪問など協調の動きがある。コロンビアの民族解放軍との停戦交渉に、ベネズエラが仲介役となっているが、カストロ兄弟の助言があるのではないか。キューバが中心となり、インテリジェンシア、あるいは情報収集できる組織を作ることで対抗できるのではないか。

Ｑ　キューバに行ったのは２回。１回目、どうして医療と教育を無料にできるのか聞いた。植民地経済のひどさを経験している国民は、教育と医療は、基本的人権の中心だという教育を受けてきているから、金がかかってもやるのだという。

２回目、革命時代の兵士がダンナの日本女性に聞いた言葉。奪い合えば足らないが、分かち合えば足りると。キューバ革命の本質だ。革命委員会から叩き上げている人たちがいるから、後継者には困らないという。

日系移民はどういう現状か、町内会のような革命委員会はどうなっているか、民主主義の母体になっているか。

Ａ（八木）　日系移民は、ピノス島（青年の島）に沢山いらっしゃる。ハバナにも。

革命前、フィデルが、ピノス島監獄に幽閉されていたとき、原田さんが同情し、食べ物や服を差し入れた。それをフィデル は感謝し、親日的ベースが作られたという。

革命防衛委員会（ＣＤＲ）は、隣人監視組織ではない。

いろいろなことを決めて、いろいろな相談にのってくれる。80 年代、一人旅をしていて、泊まるところを探していると、村の人がＣＤＲに連れて行ってくれ、宿探しをしてくれたりした。

Ａ（伊藤）　革命直後、カストロとゲバラが、農場に原田さんを訪ねて行った。接収しに。しかし、米やスイカの質の良さ、大きさにビックリしてしまう。味の良さに感動していたという。日本人が丹念に育てていることを聞いて、ゲバラは、農場を接収せず、作り方をみんなに教えてくれという。キューバ農業の基を作ったのが日系人。有機農業も、70 年から日系移民が始めた。

Ｑ　経済制裁はどうなっているか。また、女性の活躍の様子は？

Ａ（小倉）　国交回復は、行政レベルで、制裁は議会レベルの問題。アメリカ議会で共和党が大半の今、経済制裁撤廃法案は不可能だ。

Ａ（八木）　キューバの女性は恵まれている。兵役もあるが、ボランティアで代替したり、職種で免除されたりすることはある。職場では、完全に男女平等。託児所は義務付け。女性が強くなり、離婚が激増した。５～６回の離婚歴はザラだ。ホームパーティ に行くと、子どもの親がいろいろ。

最近、社会問題化しているのは、女性が結婚したくない、子どもは欲しいが男はいらないと言うこと。子どもが生まれて、男を捨てる。男が、その子は僕の子と言っても、ＤＮＡ検査は女性の承諾がいる。これで、泣いている男の子がいる。でも、男女差別はあるかと聞くと、ある、と答えが返る。私たちのとは、レベルが違うが。

Ａ（伊藤）　2002 年に、ベネズエラでクーデター未遂事件があった。これは、アメリカと中南米の関係を変えた事件だ。アメリカが筋書きを書いたクーデターが成功したかに見えた時、一端諦めかけたチャベスが、カストロに電話した。カストロは、絶対諦めるな、大統領として通せと。チャベスは、大統領職を放棄しないと言い続けた。間もなく民衆が蜂起し、クーデターは未遂に終わった。そのとき、中南米の大統領が集まった国際会議で「正当な政権はチャベス」と首脳たちが宣言した。こうして、中南米は自信を持った。

2011 年にできたＣＥＬＡＣ（ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体）は、中南米が結束してアメリカを排除、大きな流れがここで、また強くなった。

Ｑ　キューバから何を学べるか。

Ａ（小倉）　地域統合は、時代の流れ。キューバが初めて加盟したＣＥＬＡＣでのキューバの役割は大きい。今の日本の政権は、キューバ精神とはまるで別。

Ａ（八木）　感心するのは、特別期でも、大災害でも餓死者を出していないこと。分配し、教育、医療、介護が無料であることで、人間が、どれだけ精神的に安定して暮らせるか。それこそ、キューバ人が支えてきたこと。キューバに批判的な人でもキューバを一定評価する。今の日本は真逆。出来ることをするしかない。

Ａ（伊藤）　オバマが広島に行ったが、ゲバラも行ったことがある。平和記念館を見て、アメリカにこんなことをされて、まだ、何も言わないのかと、ゲバラが怒ったという。今、同じ状況がある。

参考になるものを、一言で言えば、「自立」。キューバは自立している。いじめられ、辛酸なめても、生き抜いてきた自立する姿勢を見て、日本が恥ずかしくなる。キューバは、何もなくても、 国民が凛としている。日本が学べるのは、コレだと思う。